

第三章 「心に描いた道」

どうしてこんなことになったんだろう……。目の前のスクリーンを見つめながらぼんやりと考えてみる。おそらくは時間を5時間くらい戻さないといけないような気がする。

珍しく Ryo 先輩があたしの前に現れたのが事の始まりだった。連邦政治局の研修所でコウちゃんと一緒に会ったのが最後だったような気がする。それともホトギ先輩の研究所で会ったのが最後だったっけ。どっちにしても10年ぶりくらいになると思う。

「よお、元気か？」

「どどど……。どして、Ryo 先輩がこんなところへ？誰かをお捜しですか？」

「お前さんにちょっと頼みたいことがあってな。上に話しは付けてやるから、外宇宙に行かないか？」

開発部といえば聞こえはいいんですけど、来る日も来る日も昔の書類の整理ばかりの生活から見れば、それが地獄の果てだろうが魅力的に聞こえることには間違いないだろうと思う。あたしは考えるまでもなく、その場で Ryo 先輩に連れて行ってほしいと懇願したような気がする。

で、あたしはここにいる……。

「で、どこへ向かえばいいの？」

メビウスはコンソールのモニターから視線を外すことなく問い掛けてきた。小型の探索艇ということもあって船内はそれほど明るくないのだけど、インジケーターにほのかに照らされた横顔が何となく艶っぽく感じる。

しばらくボーッとメビウスの顔を見つめる自分に不意に気がついて、恥ずかしさもあって大袈裟に視線を違う方向に変えてみる。

「ボクの顔に見とれてくれるのは光荣だけど、今はどこに行けばいいのか先に教えてほしいな。」

「べつに見とれていた訳じゃないけど……。」

あ、嘘だ……。悔しいけど確かにあたしはメビウスに見とれていたわよねえ。羨ましいのとは違うんだけど、何て言うかきれいなものはどれだけ見ても飽きないというか、ずーっと眺めていたいというか、なんか甘酸っぱい気持ちになる感じ。

「あたしたちの任務はファズアースを見つけて、進行方向をキャティに変えること。多分だけど、ファズアースの場所が分かるくらいなら、あたしたちじゃなくてもっと上の方が人が行っているんじゃないかしらねえ。」

「そんなことは分かっている。ボクが聞いているのは、ファズアースを捜すのになんか情報があるんじゃないのっていうこと。それとも、この広大な宇宙をやみくもに捜し回らなければならないのかしら？」

そんなことを言われたところで、Ryo 先輩から貰ったファイルにはそれ以上のことは書いていない。もう一つ付け加えるなら、どうしてあたしとメビウスがコンビを組むことになったのかも分かっている。

「まあ、試されているってことだけは確かなんじゃないかなあと思ったりしたんですけどね。メビウスはともかく、あたしに何を期待しているのかは、あたしも知りたいくらいな訳で……。」

「はあ……。」

わざとらしいくらいの大きな溜息。これでメビウスの機嫌が悪くなったとしても、あたしに他に

どうしろというのかという感じ。分からないものは分からないのだ。

メビウスはあたしの一つ下で、付け加えるならトップの成績で研修所を卒業したらしい。それに対して、あたしは本来なら退所処分になるところをファズアースの解析に貢献したという理由で何とか救われて、結局ギリギリの成績で卒業させてもらったという身分。あたし自身どうして開発部に配属されたのか謎なのだ。

「ボクはまだミサのことを認めた訳じゃない。でも、理由もなくミサが開発部にいる筈もないと思っている。そして、その理由がファズアースなんだと考えていた。もし、ミサがファズアースに関しても役に立たないのであれば、すぐにでもパートナーを解消してもらおうつもり。」

メビウスは初めて正面のモニターから目を離して、身体ごとあたしの方に向き直る。怒っているのかと思ったんだけど、意外にもあたしを見るその目は優しい感じ。

「ねえ、賭けをしようか？」

「へ？」

思いもよらなかった言葉に一瞬なんて答えていいのか分からず声にならない。

「ミサのことはともかくとしても、ボクもファズアースは見てみたい。主義に反するけど、ミサの馬鹿みたいな幸運に賭けてみようかと思って。」

馬鹿みたいな幸運って・・・、まあ当たっているとは思うけどいったいどういう幸運なんだかねえ。あんまりありがたくないような幸運だよねえ。

「だから今回の行き先に関して全部任す。ボクはミサの言う通り操縦するだけ。」

「ちょっと、そんないい加減な。あたしなんかを当てにすると迷子になるのがせきの山ですよ。」

「そう思うなら、頑張ってファズアースの行方を捜そうね。一応2級情報士は取ったんでしょ？」

そりゃ取ったのは事実だけど、なんか取っておかないと連邦政治局に残れないぞって先生に言われたからであって、持っているだけで何とかなるようなものでもないんじゃないかと思うんですけどねえ。でも、メビウスの楽しそうな笑顔に反論する勇気が湧いてこない。

「分かったからちょっと時間を下さい。」

メビウスはニヤニヤしながらも黙って頷いてくれた。困ったことになっちゃったけど、やってみるしかないわよねえ。

あたしがメビウスに勝る情報って言ったら、リアムに会ったことがあるってことくらい。しかも、あの時だって先生に連れていってもらっただけで、自分の力で何とかしたことなんてないんじゃないかと・・・。

自分の力で・・・？そういえば、あの時どうやってファズアースへ行ったんだっけ？たしか、ソルトリバー博士のところに行く筈で、あたしは見えない壁にぶつかったんだわよねえ。その後、口先案内人が出てきて船を用意してくれたんだ。あの船は操縦が特殊で、先生が何かをしたら暴走して、気がついたらファズアースにいた・・・。そう、気がついたらファズアースにいたのよ！

どうやってもこうやっても、気がついたらファズアースにいたんだから行き方が分かる筈もないじゃない。やっぱり、あたしなんかを当てにしちゃあいけないと思うんですけどねえ。でも、もしかしてもう一度ソルトリバー博士に会えば何かヒントが見つかるかもしれない。

「ソルトリバー博士だ！」

頭の中がグルグルした挙句にあたしは反射的に叫んでいた。あの博士に頼るしかない。あたしの直感がそう言っている。あの時、博士の船を借りたところから冒険が始まったと言ってもいいくら

い。あの船に搭載されていた特殊な操縦システムが、あたしと先生をファズアースへ導いたのだから、今度もそうすればいいんだ。

「地球と交信します。チャンネル・ホットラインD、ソルトリバー研究所。」

メビウスはなぜか何も言わず黙ったまま頷いた。どうやらあたしのやることを黙って見てみるつもりらしい。

ホットラインD…、これはほんの一部の階層の人間しか使えない専用回線で、あくまでも相手がソルトリバー博士だから使うんだけど、普通はあたしなんかが使えるような代物じゃない。とはいうものの、あの博士だと普通の通信手段では連絡が取れないので仕方がない。こういう時だけは開発部にいることを感謝しないといけないですねえ。

「ソルトリバー博士、コハラタです。今ちょっといいですかあ？」

「博士なら留守しとります。御用の方はまたのご来場をお待ちしてますがな。ほな、おおきに。」

「待って、待って、博士がいないならあんたでもいいから話しを聞いてえ。」

どうせ、今話しているのは口先案内人だろう。だとすれば、かえって好都合かもしれない。一応は一緒にファズアースへ行った仲ですからねえ。

「仕方ありませんな。あんさんとわいの仲や、今回は特別でっせ。」

「ありがとう、口先案内人。」

気になってちらっとメビウスの顔を見してみるが、相変わらずニヤニヤしながらあたしを見ている。

「あたしたち、もう一度ファズアースへ行きたいの。方法を教えて。」

「そりゃ、博士のパートマでしたらバッチリですがな。ちょっと待ってといてくれはりますか。」

不意に声が聞こえなくなる。ホットラインは繋がったままだから、どうやら違う部屋にでも行ったのだろうけど、口先案内人が口だけの姿であっち行ったりこっち行ったりするのを想像するだけでも不安が拡がっていく。やっぱり、博士が戻るまで待った方がよかったかしら。10分くらい待ったような気がするけど、ようやく口先案内人が戻ってきた。

「うまいことにスペアが一つありましたわ。ほな、これからそっちに取り付けに行きますわ。」

「ちょっと、取り付けにって、ここ何処だか分かっているのお？」

「分からんでも行きたい所に行けるのがパートマの良いところやさかい。ほな、後ほど。」

うう、そりゃ口先案内人の言うことはもっともだけど、ステーションにいりゃともかく、こんな何も無い所でどうしようって気なんだろう。

「つまり、あの口先案内人とか言うのが、本当にここにたどり着けば、そのパートマとやらが役立つのかどうか分かるってことだ。」

まあ、そうなんだけど…。もしかしてメビウスはこの状況を楽しんでいる？

「悪いね、どうせなら楽しまないともったいない。こんな機会はそうそうないからね。」

そりゃそうだけど…。なんかあたしの考えていることって、そんなに分かりやすいかしら。全部メビウスに筒抜けのような気がしてきた。

「残念、ボクは能力保持者じゃないよ。ミサが分かりやすいだけだって。」

うう、嘘ばかり…。

なんか間がもたない。何かを考えれば考えるだけ深みにはまっていくような気がする。こうなったら口先案内人でも誰もいいから早く来て欲しい。

「どうやら本当に来たようだね。小さいけど船影が一つ近づいてくる。」

メビウスが指差したモニターに見たこともない船が映っているのが見えた。しかし、相手はいつこうに交信する気配はなく、ただ近づいてくるだけ。このままじゃぶつかると思っていると、不意に通信機の緑のインジケーターが光る。何もしていないのにお互いの通信がつながったってこと？「すべての操作はこちらからするさかい。あんさんは何もせえへんでよろしおす。」

口先案内人の声だけがスピーカーから響く。ほどなくして船は勝手に接合した。いったいどうやっているのかは分からないけど、ここで疑問に抱くとファズアースなんてとてもじゃないけど行けなくなりそうで何も言わないことにする。

メビウスはというと相変わらず何も言わずにただ成り行きを見ているだけ。ちょっとした笑みすら浮かべている。

「いやいや、お久しゅう…。」

本来なら開く筈の無いドアが勝手に開いて、口だけがフワフワとこちらに近づいてくる。本当に口先案内人はここまで来たよ…。

「そちらのお方は始めてですな。わいの名前は口先案内人と言います。ごひいきに…。」

「メビウスと言います。よろしく願いますね。」

ん？メビウスは普通に口先案内人に向かって手を差し出した。口しかないのに？でも、どう見ても握手しているように見える。もしかして、メビウスには口先案内人の全身が見えているの？

「見えなくても手を出せば普通はむこうから握手してくれるでしょ？」

また、考えを読まれた…。しかし、過去に一度会っているあたしでさえ、未だ口だけのこの姿に慣れないというのに、メビウスは初対面でもう順応したというの？

「さあさあ、さっそく仕事に取りかかりますさかい、お二人はおとなしゅう見ておってくださいよ。」

思わず目をこらしてしまう。もしかしたら、よおく見たら全身が見えたりして…。でも、それはすぐに無駄だと分かる。どう見たところで、口だけが空中を行ったり来たりしているようにしか見えないのだ。しかも、何か部品を持ってきて取り付ける様子もない。

POWLA 端末の前に口だけがフワフワと近寄っていくと、キーボードを叩く音が狭い船内に広がっていく。もしかしてと思ってキーボードを見つめてみるけど、キーは勝手に引っ込んだり戻ったりしているように見える。やっぱり、ファズアース以外の場所ではどうやっても身体は見えないのかしら。

「さてさて、設定は終わりましたで。あとは好きに使うておくれやす。ほな、わいはこのへんで。」

口先案内人が触ってから 10 分も経ってないし、スペアだとか言っていた機械を取り付けた気配もない。

「ちょっと、ちょっと、まさかこれで帰るんじゃないでしょうね。」

「帰ります。あんさんたちとは違ってこれでも忙しいんや。使い方は分かりますやろ？」

なんとなく言い方に気に入らないものを感じるんだけど、ここまで一方的に頼み込んでいるというのも事実だったりする訳で、こう言われてしまっちは反論のしようもないじゃない。できたら最後まで付き合わせようと思ったんだけど、しゃーないかなあ。メビウスはというと相変わらずあたしの出方を観察しているような感じ。

「リアムがね…。まあ、行かないならいいか…。」

仕方がないので試しにちょっとカマをかけてみる。

「口だけなんでもったいないって言ってたっけ？ファズアースだと全身見えるのに不思議だよねえ。」

唇の端がピクッと反応したのが分かった。やっぱり少しは気にしている？攻めてが見つかったのなら、攻めない道理はない。

「リアムはんがなんて？」

「いや、ごめん。行かれないんだよね。今のは忘れて。」

急に口が落ち着きのない動きになってくる。

「リアムはんにはごつつうお世話になったっっちゃうのにまだお礼もしてませんのや。気になりますやろ。」

「そりゃ、自分で行って直接お礼した方がいいわよねえ。」

「やっぱり、そうですやろか。」

「そうだね。」

なんとなく頷きながらメビウスの顔を見てしまう。メビウスもこの小芝居に参加する気になったのか、一緒になって頷いてくれている。それを見た口先案内人の動きがまたもや落ち着きのない動きになって、あっち行ったりこっち行ったりせわしない。

「博士にはあとで訳を話せば分かりますやろか？」

「仕方がなかったって言ってあげるわよ。」

「ほな、お供させてもらいますわ。」

やったーっ！心の中でガッツポーズ。

「お見事……。」

メビウスがそっと耳元で囁いた。まずは第一関門を突破したということですかね。さて、この調子でファズアースまで行っちゃいますよ。

第三章 「心に描いた道」

H20. 2. JAN